

Title	朝鮮語延辺方言における発話文生成の研究
Sub Title	Research of spoken sentence generation in the Korean Yenpyen dialect
Author	高木, 丈也(Takagi, Takeya)
Publisher	
Publication year	2017
Jtitle	科学研究費補助金研究成果報告書 (2016.)
JaLC DOI	
Abstract	本研究は、朝鮮語延辺方言における話しことばの特徴を体系的に記述しようとするものである。具体的には、中国吉林省延吉市に居住する話者を対象に談話採録調査、および質問紙調査を実施し、これを①社会言語学的要因による発話文の形式的多様性と機能の関係、②言語事実と話者の発話生成意図の関係という観点から分析を行なった。本研究期間には数次の学会発表、論文投稿を行っており、これまで十分に行なわれてこなかった同変種の談話における動的作用の正確な記述、および話者の言語使用とアイデンティティの関係についての分析を行なうことができた。 This study attempted to systematically describe the characteristics of spoken words in the Korean Yenpyen dialect. Concretely speaking, we conducted a study recording speakers living in Yanji City of Jilin Province in China, as well as a paper-based survey, and analyzed the results from the viewpoints of (1) the relationship between the formal diversity and function of spoken sentences due to sociolinguistic factors and (2) the relationship between linguistic facts and the intent of the utterance generated by the speaker. During this research period, we gave multiple presentations at academic conferences and published multiple articles, accurately recorded the dynamic effects of the same variant of speech, which had not been conducted sufficiently until then, and analyzed the relationship between the linguistic usage of the speaker and their identity relationships.
Notes	研究種目：研究活動スタート支援 研究期間：2015～2016 課題番号：15H06116 研究分野：朝鮮語学
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KAKEN_15H06116seika

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19（共通）

科学研究費助成事業

研究成果報告書



平成 29 年 6 月 7 日現在

機関番号：32612

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06116

研究課題名（和文）朝鮮語延辺方言における発話文生成の研究

研究課題名（英文）Research of spoken sentence generation in the Korean Yenpyen dialect

研究代表者

高木 丈也（TAKAGI, Takeya）

慶應義塾大学・総合政策学部（藤沢）・講師

研究者番号：80759605

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、朝鮮語延辺方言における話しことばの特徴を体系的に記述しようとするものである。具体的には、中国吉林省延吉市に居住する話者を対象に談話採録調査、および質問紙調査を実施し、これを社会言語学的要因による発話文の形式的多様性と機能の関係、言語事実と話者の発話生成意図の関係という観点から分析を行なった。本研究期間には数次の学会発表、論文投稿を行なっており、これまで十分に行なわれてこなかった同変種の談話における動的作用の正確な記述、および話者の言語使用とアイデンティティの関係についての分析を行なうことができた。

研究成果の概要（英文）：This study attempted to systematically describe the characteristics of spoken words in the Korean Yenpyen dialect. Concretely speaking, we conducted a study recording speakers living in Yanji City of Jilin Province in China, as well as a paper-based survey, and analyzed the results from the viewpoints of (1) the relationship between the formal diversity and function of spoken sentences due to sociolinguistic factors and (2) the relationship between linguistic facts and the intent of the utterance generated by the speaker. During this research period, we gave multiple presentations at academic conferences and published multiple articles, accurately recorded the dynamic effects of the same variant of speech, which had not been conducted sufficiently until then, and analyzed the relationship between the linguistic usage of the speaker and their identity relationships.

研究分野：朝鮮語学

キーワード：中国朝鮮語 方言学 社会言語学 言語意識 言語使用

1. 研究開始当初の背景

『中国 2010 年人口普查資料』(第 6 回人口センサス)によると、中国には、東北地方を中心に 180 万以上の朝鮮語話者が居住しており、朝鮮半島以外における話者として、最も多い言語集団を形成している。彼らが話す変種は延辺方言、延辺地域(朝鮮)語などと呼ばれ、これまでも全学錫(1996)、崔明玉他(2002)、郭忠求他(2008)など様々な研究が行われてきた。これら一連の研究により、近年、当地域の言語使用状況は、多角的に解明されつつあるが、その一方で、既存の研究は、多言語使用、言語政策、あるいは音韻論的特徴を扱ったものが多く、言語の基本的存在様式である「話しことば」について扱った論考は、依然として少ない状況にあるともいえる。このように在外朝鮮語の中でも最も多い話者人口を持つ延辺方言に関する研究が、(他変種との比較においても)遅れているという状況は、共時態としての朝鮮語全体の体系的記述を困難にしかねない。そこで、本研究では、こうした状況をふまえ、吉林省延辺朝鮮族自治州の中心都市である延吉市における談話について調査、分析を行なうとともに、話者の言語意識についても解明を試みようと思う。筆者がこれまで行ってきたソウル方言についての研究経験、成果を取り入れつつも、これを発展させ、当地域の言語使用の普遍性、特殊性を体系的に記述したい。

<引用文献>

郭忠求、全学錫他(2008)『中国移住韓民族の言語と生活：吉林省回龍峰』太学社
国务院人口普查办公室、国家统计局人口和社会科技统计司(2012)『中国 2010 年人口普查資料』中国統計出版社
崔明玉、郭忠求、全学錫他(2002)『咸北北部地域語研究』太学社
全学錫(1996)『朝鮮語方言学』延辺大学出版社

2. 研究の目的

本研究は、朝鮮語延辺方言における話しことばの特徴を体系的に記述しようとするものである。

具体的には、中国吉林省延吉市に居住する話者を対象に(1)談話採録調査、および(2)質問紙調査を実施するが、前者については、社会言語学的要因と発話文の形式的多様性の関係という観点から、後者については、言語意識と言語使用の関係という観点から分析する。

本研究の特徴は、延辺方言の談話に関する研究史上の希少性、形式と機能という分析項目の多角性、質的調査と量的調査の双方向から分析する記述の信頼性に見出される。本研究により、これまで十分に行なわれてこなかった同変種の談話における動的作用、および話者の言語意識に対する正確な記述が可能になるだろう。

3. 研究の方法

本研究は、2015 年 8 月 28 日から 2017 年 3 月 31 日の期間にわたって行なわれた。

それぞれの年度における研究内容は以下のとおりであった：

(1)2015 年度

初年度となる 2015 年度は、朝鮮語延辺方言を分析するに際して前提となる 理論的枠組みの構築から、談話採録調査の準備、談話採録調査の実施、談話資料の文字化、タグ付けまでを行なった。具体的な内容は以下のとおりである：

理論的枠組みの構築

(2015 年 8 月～2016 年 1 月)

まずは、延辺方言、談話分析に関する関連論考(辞書類を含む)を可能な限り広範囲に入手し、発話形式(文末形式と待遇法体系の関係も含む)、文法的機能に関する理論的枠組みを構築した。

談話採録調査の準備(2016 年 1～2 月)

理論的枠組みの構築と並行して、2016 年 1 月に行なう談話採録調査の準備を進めた。

談話採録調査の実施(2016 年 3 月)

中国吉林省延吉市において談話採録調査を実施した。調査にあたっては、話者の属性(年代、性別)や、対話者との親疎関係という社会言語学的要因を考慮した 18 件の 2 者間談話を設定した。採録は自由談話により 30 分行ない、談話採録後には、すべての話者にフォローアップ調査を実施した。

談話資料の文字化、タグ付け

(2016 年 3 月)

延辺方言話者による談話音声資料の文字化をした。文字化資料は、Excel 形式により作成し、文字化の範囲は 20 分とした。文字化資料が完成した後は、表記の一貫性、音 声と文字の一致といった観点から再確認し、問題がある箇所があれば、延辺方言話者に随時、確認を行なった。3 月末時点で、終わらなかったものについては、2016 年 5 月初旬までに全て終了するよう作業を進めた。

(2)2016 年度

2 年目であり最終年度となる 2016 年度は、談話採録調査の整理、質問紙調査の実施、分析を行なった。具体的な内容は以下のとおりである：

談話採録調査の整理(2016 年 4 月～8 月)

2015 年度後期に実施した談話採録調査の整理を進め、延辺方言の文末形式、意味機能が年代、性別、談話場面(親疎関係)といった社会言語学的要因によっていかなる差異をみせるかを分析した。

当期間の研究成果は、2016 年 10 月に天理大学で開催された第 67 回 朝鮮学会大会において口頭発表を行なったほか（「延辺地域朝鮮語における文末形式の社会言語学的研究」）、2017 年 3 月に刊行された『韓国朝鮮文化研究』16 号にも論文が掲載された（「延辺地域朝鮮語の終止形語尾「-jae」に関する一考察」）。

質問紙調査の実施、分析

（2016 年 8 月～2017 年 3 月）

吉林省 延吉市、長春市、長白市、通化市、遼寧省 桓仁満族自治県などの朝鮮族高校で調査を実施し、朝鮮族 4 世、5 世の言語使用と意識の関係の分析を試みた（当初、延吉市での調査のみを計画していたが、現地の高校教員の協力を得て、複数地域での調査実施が可能になった）。

当期間の成果は、2017 年 8 月にオーストラリアで開催される第 13 回 国際高麗学会で口頭発表をすることが決定している（「中国朝鮮族 4、5 世の言語使用と言語意識」）。

なお、このほかにも「延辺地域朝鮮語の談話における文末形式—親疎関係、話者の属性による差異に注目して—」（『言語研究』）、「延辺地域語の待遇法体系と終止形語尾」（『韓国語教育論講座 第 3 巻』）の掲載が決定しているほか、「在韓朝鮮族の言語使用と意識 - 安山市居住者に実施した質問紙調査から -」（中国韓国語(朝鮮語)教育研究学会、2017 年 5 月【共同】）、「鴨緑江以北地域の中老年層談話における発話形式の特徴 - 終止形語尾の出現に注目して -」（ICKL20、2017 年 6 月【単独】）の口頭発表が決定している。

4. 研究成果

上述のとおり、本研究は、(1)談話採録調査と(2)質問紙調査という 2 つの調査の実施とその分析を中心に展開された。それぞれの調査において明らかになった結果、および今後の課題は、以下のとおりである：

(1)談話採録調査

延辺方言話者による 18 の 2 者間談話を文字化し、そこに観察される発話形式を終止形語尾の使用という観点から分析を行なった。特に親疎関係や話者の属性といった社会言語学的観点から分析を行なった結果、以下の 4 点が明らかになった：

延辺方言における待遇法等級は、談話全体としては、概ね 4 等級に分布しており、下称、略待の使用が多いことが確認された。これは、「-ta」や「-ci」といった形式が、友人談話（親）のみならず、初対面談話（疎）においても使用されうるといふ当方言の特徴を反映したものである。また、本調査では、中称語尾は、40 代を下限として 10 代話者の発話においては確認されておらず、10 代においては、40 代、60 代と比べ、待遇法の分布範囲が狭くな

っていることがわかった。

延辺方言の終止形語尾には、他の方言形にはみられない融合、脱落により生成された形式が多いことが確認された。具体的には、以下のような形式である：

(a) 【-s@p-(謙譲)】 + 【- -(目撃)】 + 【終止形語尾】の融合形

-pteyta/supteyta（上称）
-ptentwu/suptentwu（上称）
-ptey/suptey（中称）

(b) 【-s@p-(謙譲)】 + 【終止形語尾】の融合形

-kkwuma/sukkwuma（上称）
-mtwu/sumtwu（上称）

(c) 【接尾辞】 + 【- 】の融合形

-cay（<-cay- + -ni）（下称）
-kay（<-kays- + -ni）（下称）
-tay（<-te- + -ni）（下称）
-lay（<-la- + -ni）（下称）
-a/e（<-ass/ess- + -ni）（下称）

(d) その他の融合形

-nun/(u)nmay（下称）、-cimwu（略待）

(e) 脱落形

-mta/sumta（上称）

このうち、「-s@p-」の融合形 (a)、(b) は、40 代以上の談話で、「接尾辞 + -」の融合形は、10 代の談話で多く使用されることが確認された。なお、「-nun/(u)nmay」や「-cimwu」、「-a/e」（下称）といった形式は、基層方言の記述には、みられないもので、分析地域において独自に発達した語尾であると思われる。

共時態としての延辺方言では、基層変種である咸鏡道方言のほか、60 代以上の談話においては、六鎮方言に起源を持つ語尾も使用されていること、さらには（特に 40 代の談話においては）ソウル方言の影響も散見されることが確認された。ソウル方言の影響は、主に略待において確認され、略待上称における使用は、極めて少ないことも確認された。

延辺方言においては、形態は同じであっても、他の多くの方言形とは異なる使用域を持つ語尾が存在することが確認された。「-ta」や「-ci」のほか、「-a/e」（下称）、「-nya」などがその例であるが、こうした語尾は、親疎関係や話者の属性といった点において、他方言とは、異なる出現をみせることがわかった。

このように同時代の延辺方言の談話にみられる終止形語尾は、基層方言のそれを一部、維持しながらも他変種の影響も受け、独自の使用域を持つ語尾体系を構築していることが確認された。ただし、本調査では、同年代

の話者同士における談話を設定したうえで、話者の年代、性別、親疎関係による出現差について分析するに留まったため、年代差のある話者との談話や、対話者との社会的関係による発話の差異については、十分な分析ができなかった。今後は、こうした点についてもさらなるデータを確保しながら、質的、量的な分析を行なっていきたいと考えている。

(2)質問紙調査

吉林省延吉、長白、長春、通化、遼寧省桓仁の朝鮮族高校に通う移民4、5世の学生435人に実施した質問紙調査の結果をもとに言語使用状況と言語意識を分析した。分析の結果、以下の4点が明らかになった：

被験者の言語使用は、対話者の年齢が上がるほど朝鮮語の使用が多くなり、下がるほど漢語の使用が多くなる傾向がある。ただし、延吉に限っては、いずれの話者に対しても朝鮮語の使用が他地域より多く現れており、朝鮮語優勢の言語使用が行なわれている。

朝鮮語能力の自己評価は、自治州に位置する延吉において、いずれも高く、長春、桓仁において、比較的低い。また、長白、通化は、概ね高いものの、延吉には及ばない。漢語能力の自己評価は、延吉で低く、それ以外の地域においては、比較的高い。

自己の朝鮮語の基層方言について知識を持たず、上の世代の朝鮮語を異質なものと認識する被験者が存在する一方で、いずれの地域においても子供には朝鮮語を継承したいという被験者が多く存在する。

いずれの地域においてもテレビ以外の韓国語との接触経路を持ち、韓国語からの一定の影響を受けていると自覚する被験者が一定数いる一方で、外来語に対しては理解が難しいと感じている被験者も多く存在する。

本調査により、居住地域の差は、朝鮮語話者の言語意識と言語使用に差をもたらす一方で、移民第4、5世に共通する言語意識もみられることが明らかになった。ただし、本稿はあくまで質問紙調査の結果を分析したに過ぎなかったため、各回答の要因については、踏み込んで分析することができなかった。今後は、質的にさらなる充実を図りながら、調査を続けていきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計5件)

高木丈也、延辺地域語の待遇法体系と終止形語尾、韓国語教育論講座、査読無、第3巻、2017(forthcoming)、頁数未定

高木丈也、延辺地域朝鮮語の談話における文末形式—親疎関係、話者の属性による差異に注目して—、言語研究、査読有、152号、2017(forthcoming)、頁数未定

高木丈也、延辺地域朝鮮語の終止形語尾「-」に関する一考察、韓国朝鮮文化研究、査読無、第16号、2017、85-99

高木丈也、遼寧省地域朝鮮語話者の言語意識—瀋陽市朝鮮族中学における質問紙調査の結果から—、学苑、査読無、第905号、2016、32-40

高木丈也、遼寧省地域朝鮮語における友人談話の発話形式—基層方言との関係という観点から—、朝鮮学報、査読有、第241輯、2016、29-66

〔学会発表〕(計4件)

高木丈也、

4, 5

(中国朝鮮族4, 5世の言語使用と言語意識)、国際高麗学会 The 13th ISKS (International Society for Korean Studies) conference、オークランド大学(ニュージーランド・オークランド)、2017年8月3, 4日(予定)

URL:

<http://www.isks.org/office/head/conf2017.html>

高木丈也、

-

(鴨緑江以北地域の中老年層談話における発話形式の特徴—終止形語尾の出現に注目して—)、国際韓国語学会 The 20th Meeting of the ICKL(International Circle of Korean Linguistics)、ヘルシンキ大学(フィンランド・ヘルシンキ)、2017年6月29日(予定)

URL: <http://blogs.helsinki.fi/ickl-20/>

高木丈也、延辺地域朝鮮語における文末形式の社会言語学的研究、第67回 朝鮮学会大会、天理大学(日本・天理)、2016年10月2日

〔その他〕

・予稿集

以下に関しては、口頭発表が決定していたものの、THAAD問題により、国外発表者の招聘が急遽、キャンセルされたため、参加不可となった(学会予稿集には、原稿提出済):

高木丈也、新井保裕、

-

(在韓朝鮮族の言語使用と意識—安山市居住者に実施した質問紙調査から—、中国韓国語(朝鮮語)教育研究学会

2017 年度 国際学術大会、西安外国語大学
(中国・西安) 2017 年 5 月

・ホームページ等

以下の個人ホームページにより、研究の進捗
状況などを随時、発信している：

<https://t-takagi.jimdo.com/>

6 . 研究組織

(1)研究代表者

高木 丈也 (TAKAGI, Takeya)

慶應義塾大学・総合政策学部・専任講師

研究者番号：80759605